宿場町
ひらかた

第８３号

発　行
宿場町枚方を考える会
会長　堀家　啓男
072-892-5504

事務局
枚方市出口２丁目6-6
上野幸夫　072-832-5722

編 集 広報委員会

主な内容

○30周年記念式典を開催（1頁）
○行基ゆかりの喜光寺を訪ねて（2頁～4頁）
○本陣あれこれ（5頁～6頁）
○小野小町（7頁～12頁）
○江戸時代、鵲橋はなかった（13頁～16頁）

宿場町枚方を考える会 結成３０周年 記念式典を開催

宿場町枚方を考える会は昭和60年3月、三矢町の浄念寺において結成総会を開きました。以来、諸先輩の熱意と尽力により、平成27年に結成30周年を迎えました。

これを記念し、平成27年11月15日、メセナひらかた会館多目的ホールにおいて記念式典を開催し、会員、一般市民など２３０人の参加をいただきました。

式典では、堀家啓男会長から、「枚方宿を顕彰し、後世に伝えていく」という本会結成の原点に向けて尽力されてきた諸先輩を始め、ご支援いただいた関係者に感謝しながら、今後も本会発展に努力していくとの決意が表明されました。

堀家会長の挨拶に続き、来賓としてお招きした枚方市長伏見隆さん、枚方文化観光協会の大西信駛理事長からは、本会の活動を評価し、敬意を表するとの祝辞をいただきました。

伏見隆枚方市長

大西信駛理事長

記念式典の後は、大阪府教育委員会文化財保護課副主査の西川寿勝さん、堺女子短期大学名誉学長で文学博士である塚口義信さんの記念講演会を開催しました。

また、会場横の廊下などを利用して、東海道や枚方宿に関する資料展示会を実施しました。

宿場町枚方を考える会
バス見学会

行基菩薩ゆかりの喜光寺などを訪ねて

八幡市　榊原　啓雄

喜光寺

平成27年12月1日、奈良の喜光寺などを訪ねました。

お寺の縁起によりますと、奈良の都のほぼ中央に当たる平城京右京三条三坊に位置し、養老5年（721年）に行基菩薩により創建されました。

古くは「菅原寺」と呼ばれていました。天平20年（748年）、聖武天皇が行基の病気見舞いのために当寺を参詣された際、ご本尊から不思議な光明が放たれ、そのことを喜ばれた天皇が「喜光寺」という寺号を賜ったとあります。

また、東大寺造営にあたり、喜光寺の本堂を参考にしたという伝承から、この寺は「試みの大佛殿」としても知られています。行基菩薩は、喜光寺を東大寺の大仏建立勧進の拠点として全国を行脚されましたが、天平21年（749年）ここ喜光寺で入寂されました。

行基菩薩坐像（喜光寺行基堂）

当日、訪問時間帯の参詣者は私たちだけでした。寺の責任者である高次副住職（住職は薬師寺の管長が兼務）の案内により、ご本尊の阿弥陀如来さまが安置されている本堂に入りました。

喜光寺本堂

高次副住職から、「ます、お話の前にまず読経しましょう。お一人ずつご焼香もしてください」との話がありました。礼拝して焼香を済ますと、丁寧な読経と参加者一人ひとりに対する加護のお祈りをしていただきました。

法話は、とても分かりやす

くユーモア溢れる内容でした。「落語の原点は、法話である」ということがよく理解できるものでした。

菅原天満宮

喜光寺を後にすると、すぐ隣にある日本最古の天満宮を参観しました。

菅原天満宮

喜光寺が創建当初、菅原寺と呼称されたのは、このあたりが菅原の里であったためです。現在もこのあたりは奈良市菅原町という住所名です。

伝承によりますと、菅原道真もここで生まれ、神社の東側には、「産湯に使った」という小さな池があります。

菅原天満宮遺跡天神堀

菅原天満宮略記によると菅原氏は古代豪族の土師氏の出であり、道真の曽祖父の時、土師から菅原と改姓し、文筆をもって朝廷に仕えるようになりました。

行基菩薩も菅原道真も先祖は、渡来人であったといわれますが、渡来人の実態はまだまだ解明されていないようです。今後の研究を期待したいものです。

天平倶楽部

昼食は日本料理の天平倶楽部でいただきました。

天平倶楽部の玄関

お店の裏側に「子規の庭」と名付けられた日本庭園がありました。説明板によると、かつて天平倶楽部の地に老舗旅館があり、正岡子規が明治28年10月26日から4日間この旅館に滞在、近辺を散策して多くの句を残したそうです。

子規の庭（天平倶楽部）

元興寺

午後の参観は、奈良観光ボランティアガイドによる「世界遺産の元興寺」と「奈良町散策」です。

午前の喜光寺では、外国人

の参詣者は皆無でしたが、ここでは、外国人旅行客も多く見受けられました。

元興寺は、奈良市にある南都七大寺のひとつに数えられる寺院です。

元興寺極楽坊本堂（国宝）

蘇我馬子が飛鳥に建立した日本最古の仏教寺院である「法興寺」（飛鳥寺とも呼ぶ）がその前身です。

法興寺は平城京遷都に伴って飛鳥から新都へ移転し、元興寺となりました。奈良にある他の世界遺産と比べると規模は小さいですが、花のお寺とも呼ばれているように、四季を通して美しい花が咲き乱れるお寺です。

行基の師匠である道昭和尚は、飛鳥の「法興寺」の一隅に禅院を建立して住み、法相教学を修めました。晩年は全国を遊行し、各地で土木事業を行いました。

元興寺参観後は、３グループに分かれての「奈良町散策」。そして、お楽しみの「旬の駅ならやま」で新鮮なお野菜などの買い物や喫茶をし、予定通りの時刻に枚方到着しました。

一日バス研修旅行が順調に無事終えられたことに感謝申し上げます。

元興寺東門（重要文化財）

「本陣」あれこれ

小倉東町　平良一郎

「本陣」というのは、戦国時代以前は、戦場において大将が位置する本営を指す軍事用語でした。

本陣は、野営が多く、その陣営には陣幕を張りめぐらしていたようです。このことから後には、幕府、幕僚、幕閣、幕臣、幕末などの言葉が生まれました。しかし、必ずしも野営ばかりではなく、寺社などの大きな建物があれば本陣として利用する場合もあったようです。

本陣の位置は、戦術上では小高い丘の頂上のような見晴らしの良い場所が常識的です。関ヶ原の戦いでは、徳川家康は桃配山に、石田三成は笹尾山に本陣をおいています。

しかし、今川義元は対戦相手を甘く見て、常識を無視し、桶狭間の窪地に本陣をおいて、織田信長の急襲を受けて討ち取られました。

近代になると本陣は、本営と名を変えました。日清戦争のころから、大本営という言葉になりました。大本営発表というのは、後の時代には嘘のかたまりのようなイメージになっています。現代では、本営は風俗営業の用語として復活しています。

本陣のことに話を戻します。本陣は江戸時代以降の宿場で、大名や旗本、幕府役人、勅使、宮、門跡などが使用した宿泊施設の名称に変化しています。江戸時代に入り、参勤交代制度が実施された結果、大名が泊まるための本陣と、それに次ぐ武士（家老など）や公家を対象にした脇本陣（仮本陣、相本陣ともいう）が全国に設けられました。脇本陣は、空いている時には一般旅行者も泊めたようです。

東海道には本陣だけでも１１１軒、全国では推定１０００軒以上はあったといわれています。ひとつの宿場には必ずしも１軒ずつ本陣があるとは限らないようです。

枚方宿には、本陣（池尻善兵衛家）と、家老専用本陣（中島九右衛門家）との２軒の本陣があり、脇本陣も２軒ありました。

三矢公園（枚方宿本陣跡）

通常は、大名は本陣に、家老は脇本陣にというのが定番

のようですが、枚方宿の場合、紀州徳川家が上得意先であり、そのニーズに合わせて家老専用本陣があったようです。というのは、紀州徳川家の家老の安藤家、水野家はともに3万石余の扶持高であり、徳川家康から直接任命された御付家老であるために、大名級の扱いになっていたようです。

東海道最大の宿場町といわれる宮宿（愛知県名古屋市熱田区）には、旅籠が２４８軒あり、枚方宿55軒の5倍に近い軒数ですが、本陣2軒、脇本陣1軒で、枚方宿よりもなぜか少ない本陣数でした。

幕府が軍事上の目的から、東海道の大井川には架橋を認めないため、旅人は馬や人足を利用して、輿や肩車で渡河しました。このため大井川は東海道屈指の難所とされていました。大井川の洪水の際には川留めが行われました。水深四尺五寸（1・5m）、人足の肩を超えると全面的に渡河禁止となりました。大井川を挟んだ対岸に島田宿、金谷宿（いずれも静岡県島田市）がありましたが、旅人は川留めの影響で数日間滞在することもあり、それぞれ3軒ずつの本陣がありました。

松原宿（大阪府東大阪市）は暗越奈良街道唯一の宿場町でしたが、本陣や脇本陣はなく、宿屋19軒だけでした。

本陣は宿泊施設とは限りません。紀州街道助松宿（大阪府泉大津市）の田中本陣（田中覚右衛門家）は、宿泊施設ではなくて、休憩のみという本陣でした。枚方宿同様に紀州公が常連客だったようです。

本陣が宿場町の中にあるとは限りません。京街道河内国交野郡楠葉村（枚方市町楠葉）には、小休本陣米谷友右衛門家があり、休憩のみという本陣でした。

米谷家の小休本陣は鳥羽伏見の戦いのとき、幕府軍に放火されて消失しました。かろうじて焼け残った木。

江戸時代以降の本陣は、商業的な宿泊施設ではなく、地元の有力旧家の邸宅が本陣として指定されることが多く、営利よりも名誉が優先していたようです。

明治初年、明治天皇は大坂行幸の際、枚方宿本陣で昼食、守口宿で泊まられました。しかし、なぜか本陣ではなく、守口宿内の難宗寺に宿泊されています。東京行幸の際にはほとんど各宿の本陣に泊まられたようです。

明治大帝玉座（難宗寺）

なお、天皇が宿泊された場合は、本陣ではなく行在所（あんざいしょ）と呼びます。

難宗寺山門脇にある「明治天皇守口行在所」の碑。

小野小町

伊加賀西町　河野　靖忠

小町と随心院

京都市山科区小野に真言宗大本山髄心院があります。開山したのは仁海です。仁海（にんがい・９５４年～１０４６年）は和泉で生れ、高野山金剛峰寺で得度しました。

仁海は、母が亡くなって牛になっている夢を見ました。仁海はその牛を探し出し、小屋を建ててその牛を飼うことにしました。だが牛は間もなく死にました。悲しみに暮れた仁海は、その牛の皮を剥ぎ、両界曼荼羅を描いて本尊とし、寺号を「牛皮山曼荼羅寺」としました。そして牛を裏山に埋め、菩提を弔いました。山は牛尾山といいます。

この時代、ダムやため池などの灌漑施設がなく、少し日照が続くと、すぐに旱魃になりました。

朝廷は、各寺院に雨乞いの祈祷をさせました。仁海も命ぜられて神泉苑で祈祷しました。仁海が雨乞いの祈祷をすると、その効果が現れたのか、その度に雨が降りました。そして仁海は「雨僧正」と呼ばれるようになりました。

当時、旱魃は祟り（たたり）と考えられていました。雨乞いの祈祷は、空海が８２４年に成功し、その手法は真言僧に伝えられていきます。仁海僧正は空海から八代目、92歳まで生きたといわれています。

五世住持「増俊」の時、曼荼羅寺の塔頭（たっちゅう）として「髄心院」が建立されました。髄心院は、小野小町邸宅の跡といういい伝えがあります。

その後、後堀川天皇の宣旨により門跡寺院となり、摂家の住持となります。摂家とは、近衛家、九条家、二条家、一条家、鷹司家の五摂家のことで、すべて藤原氏です。一条家、二条家、九条家の出身者が門跡として入寺しています。

狩野永納作の四季花鳥図や狩野派のふすま絵である四愛図の四愛は、儒学者である虞集（きょしゅう）の詩に由来し、菊、蘭、蓮、梅の四つです。多くの襖絵を所有していることから、門跡寺院の風格があるといわれてきました。

この寺の御朱印は「髄心院曼荼羅殿」です。また、仁海作といわれる牛皮で作られた牛皮華鬘（ごひけまん）は、仏前に飾る仏具として残され

ています。

山科区小野は、小野氏の拠点であり、小野氏の邸宅がありました。小野篁（おののたかむら）（延暦21年・８０２年～仁寿2年・８５３年）の父、参議小野岑守（おののみねもり）は、嵯峨天皇の侍読（家庭教師）であり、「岑守は学問に優れていたのに、篁は弓馬の士になってしまった」と嘆きました。それを聞いた篁は、猛勉強してとうとう紀伝道（漢文学の先生）になりました。公卿である篁は、朝廷を風刺する漢詩を作り、嵯峨上皇を怒らせて隠岐へ流罪となりましたが、後に赦免されています。文才のある篁の漢詩は特に優れ、各人に広く詠まれて、道康親王の東宮学士（家庭教師）になります。その後、道康親王は即位して文徳天皇となります。篁の病気が重くなると、天皇は悲しみ、色々と目をかけて医者や食料、さらにお金などを施しましたが、そのかいもなく51歳で亡くなりました。篁は、背丈が六尺二寸（１８８センチ）の巨漢であったといわれています。なぜか、紫野に篁と紫式部の墓が並んでおり、この墓は14世紀には、もう既にあったといわれています。

小野篁の墓（左隣に紫式部の墓）

小野小町の墓や供養碑などは日本各地にあります。小町は、８２５年～９００年に生きたという説があります。これは安部清行と「下つ出雲寺」で出会った時の歌が古今和歌集に残されていることによるものでしょう。9世紀の女流歌人でもあるのですが、８２５年の生まれだとすると、篁が23歳の時に小町が生れたことになります。一部の資料には、小町は小野篁の孫となっていますが、篁の孫とすると計算が合いませんし、決定的な証拠もありません。

京都寺町に下御霊神社があります。秀吉の神社政策によってこの場所に集められた一社です。元の地は下出雲寺の鎮守として建てられた神社といわれています。現在の下御霊神社の地は、下出雲寺の跡地といわれています。

安部清行は、天長2年（８２５年）～昌泰3年（８９５年）、嵯峨天皇に仕えた大納言安仁の息子です。清行が下出雲寺の法事に出席した時、小野小町も出席していました。一目で見初めた清行が小町に歌を贈りました。

下つ出雲寺に、人のわざしける日、真静法師の導師にて、言えることを歌に読みて、小野小町がもとにつかわしける。

「つつめども袖にたまらぬ白玉は　人を見ぬ目の涙なりけり」清行

このように書いて小野小町に渡したら返事が来ました。

「おろかなる　涙ぞ袖に玉はなす　我はせきあえずたぎつ瀬なれば」小町

おろかなる、とバカにされています。この恋は実りませんでした。またこの一句で小野小町の性格が分かるという先生もいますが、小町は花を愛でるような優しい詩を多く歌っています。

左京区静市に「補陀洛寺（ふだらくじ）」があります。天徳3年（９５９年）、中古三六歌仙の1人である清原深養父（生

没年不詳）が建立して隠棲したといわれています。

お堂には、平安時代の作とされる阿弥陀三尊像と小町の年老いた像が安置されています。小町入寂の地といわれていて、見所としては、小町供養塔、姿見の井戸、泣きながら生えたといわれるススキなどがあります。

東福寺の塔頭に、貞和2年（1346年）創建の退耕庵があります。門をくぐるとすぐ右側に小町寺という地蔵堂があります。

地蔵は玉章地蔵（たまずさじぞう）または「文張り地蔵」といいます。渋谷越の苦集滅道または久々目路（くずめみち）にあった小野寺が1875年の廃寺に伴い、玉章地蔵、扁額、井筒（井戸枠）をこの寺に移しました。

玉章地蔵には、小野小町に寄せられた大量の恋文を地蔵の胎内に納めたとか、地蔵に貼り付けたともいわれています。地蔵は高さ2メートルもある巨大な物で、土でできているそうです。胎内には慈眼大師作の三尺程の石の五輪塔が内蔵されていましたが、手紙などはなかったそうです。

東福寺塔頭退耕庵の地蔵堂

「玉章」の説明は「手紙」となっていますが、手紙ではありません。手紙などの文章を手書きすると、文章を間違えることがあります。間違えた紙を丸めてポイと捨てる、その丸めた紙を「玉章」といいます。現在では、多くの人がワードを使うので、そのような無駄はありません。

小町は絶世の美女といわれ、多くの殿方から沢山の手紙が寄せられたといいます。手紙を読んだのか、読まなかったのかは分かりませんが、手紙を丸めて捨てたというのです。

山科区小野の地は小野篁の領地だといわれています。その一角に小野小町が住まいした牛皮山曼荼羅寺がありました。現在は真言宗善通寺派曼荼羅寺「髄心院」といいます。この寺の前方には、化粧井戸、裏には多くの殿方から寄せられた恋文を埋めたという文塚があります。

「花の色は　移りにけりないたづらに　我が身世にふるながめせし間に」小町

「花の色はあせて、ぼんやりと雨を眺めている間に、私は老けてしまった」、このように訳されています。

「伝説百日通い」という伝説があります。小町は、突然訪れて来た深草少将に「今宵から毎夜百日の間、1人で私の元に通って来てください。百日目にはあなた様の望み通りになりましょう」と突き放し、相手にしませんでした。

だが深草少将は、毎夜深草から小野の曼荼羅寺まで、細い山道の峠を越えて、往復2時間はかかったであろうに、99日間通って来ました。（現在は府道35号線の一本道で、大坂道ともいいます。京阪藤森駅から片道50分ほど、峠の坂道は自転車でも登れます）

ところが、あと1日という日に来ませんでした。その日数を小町は、榧（かや・イチイ科の常緑樹で木は硬く船材や碁盤、将棋盤の材料になります。また、種子からは油が取れるそうです。国語小事典）

の実で数えていました。その日は雪が降る寒い日でした。小町は、雪の降る寒い日なので、とうとう諦めたのだと高を括っていました。しかし、深草少将は雪の中で倒れ、返らぬ人になっていたのです。それを聞いた小町は、自分のおろかさに嘆き悲しみながら、榧の実を深草少将が通ってきた道に植えました。今も寺近くの道沿いに大きな榧の木があります。樹齢は４００年ぐらいといわれますが、木の知識がない私には、どれが榧の木かもよくわかりません。

「思いつつ　寝ればや人の　みえつらむ　夢と知りせば　覚めざらましを」小町

貴方のことを思いながら寝ると貴方が見えました。夢と知っていたら、目覚めずに眠っていたのに。

「深草少将」「通小町」「百夜通い」などは、観阿弥とその子の世阿弥が創作した能楽作品や古今集などから俗説が生れたのではないかといわれています。

供養塚　（左）小町（右）深草少将

深草少将の屋敷跡に建てられたという寺があります。京阪墨染駅近くにある「欣浄寺・ごんじょうじ」寺伝によると、寛喜2年に（１２３０年）道元善師が創建したといわれています。それ以前は、桓武天皇から深草少将義宜が宅地を賜り、往時は8町4面の広さがありました。後任2年（８１３年）3月16日薨去、この地に埋葬されました。「法名、清涼院殿蓮広浄輝大居士」といいます。

随身院には２３０本の梅の木があります。小野梅園と呼ばれているそうですが、良く手入れされています。梅林としては特別に広い訳でもありません。古くは、はねずの梅と呼び、薄紅色を「はねず」いったそうです。昭和48年にはねず踊りが復活、3月に少女がはねず色の着物で踊りを奉納したそうです。

小野小町の資料は大変少ないのです。江戸時代初期の絵師である狩野探幽が描いた清少納言、紫式部、和泉式部、そして小野小町などの人々と、探幽は数百年の隔たりがあり、顔など知らないはずですが、北野天満宮の絵馬堂に小町の絵が残されているそうです。

小町に関する俗説を少し述べると、「待ち針」を「小町針」ともいいます。言い寄る殿方が多い中、その殿方になびくことなく、一生独身で通したとされ、そのため穴のない女と噂され、穴のない針を小町針と呼んだのだそうです。

墓所は各地にあり、列挙すると次のようになっています。

（墓所の項はインターネット百科辞典による）

宮城県大崎市　墓
福島県喜多方市　供養塔
栃木県栃木市　墓
茨城県土浦市　墓
京都府京丹後市　墓
鳥取県伯耆市　墓
岡山県総社市　墓
山口県下関市　墓
和歌山県和歌山市湯谷には、熊野参拝の途中で亡くなったとする伝承があります。

小野篁と六道珍皇寺

京都市東山区大和大路四条に臨済宗の六堂珍皇寺があり

ます。東山の鳥辺野の入口にあたります。小野篁には、毎夜、珍皇寺本堂裏の井戸から冥府〔冥土〕の閻魔庁の閻魔大王の下で死者の魂を裁く裁判の補佐官を務めていたという伝説があります。また、井戸ではなく、この寺にある閻魔堂から六道の魔界へ出入りしていたという説もあります。何れも作られた伝説にすぎません。古代の風葬の地、鳥辺野があります。奥には清水寺があり、この清水寺は宝亀9年（778年）、延鎮により創建されたといわれています。

本堂の翼廊といわれる部分を舞台作といい、妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五の諸説に基づいて作られているそうです。（妙法蓮華経というのは序品第一から普賢菩薩勧発品第二十八まであり、第二十五から二十八までを観音経といいます）

鳥辺野が風葬の入口にあたることから、このような伝説が生れたと思います。平安時代にも火葬があったようですがお金がかかりました。

嵯峨野にある京の風葬の地としては、化野（あだしの）、紫野、蓮台野がありました。紫野は広く、平安時代には桓武天皇や嵯峨天皇が狩猟した所でもあり、その後で天皇の離宮である雲林亭で、今でいう宴会が開かれ、狩猟で得た雉や山鳥などが供されました。なお、紫野の地名は死者の血で赤く染まったからといわれています。

死者を運ぶ道に千本鞍馬口があります。ここに閻魔前町がありますが、ここから千本通を北へ行くと蓮台野があります。この道に卒塔婆が千本立てられていたので千本通といわれたそうです。化野には、あだし野念仏寺があり、空海が散らばっていた死体を埋葬し、供養したという寺です。

あだし野念仏寺

また、六波羅蜜寺近くに飴屋があります。ある夜、店じまいをすると、雨戸をたたく音がして、出てみると青白い顔をした若い女性が「飴をください」と一文銭を差し出しました。主人は怪しみましたが、悲しそうな小声で頼むので飴を売りました。翌晩、またその女が「飴をください」と一文銭を差し出すので、不思議に思いながらも売りました。7日目の晩に「もうお金がありません。これで飴をください」と、女物は羽織を差し出しました。飴を渡してから気になったので、後を付けて行くと、鳥辺山の墓地の前で姿が見えなくなりました。そして、どこからか赤ちゃんの泣き声がします。捜しに行くと、あるお墓の中から泣き声が聞こえます。お坊さんと一緒に掘り出して見ると、赤ちゃんが女の胸の上で泣いていました。赤ちゃんを育てるため、幽霊になって飴を買いに来たのです。

東山区轆轤町六道の辻
みなと屋子育て飴本舗

「尊卑文脈」に、小野小町は小野篁の息子、小野良真の

女とあります。小野良真の娘で、名前を小野比古姫とするもっともらしい説がありますが、当てにはなりません。

小野篁は延暦21年（802年）～仁寿2年（853）、また小町は天長2年（825年）～昌泰3年（900年）とするならば、年代が合いません。このようなことから小野小町は、架空の人物という人もいます。

「小町」という名から、姉とともに仁明朝（833年～850年）、あるいは文徳朝（850年～858年）の後宮に、更衣または中臈女房として仕えていたのではないか、といわれています。

熊谷直春先生は、小野小町は本名であり、小野滝雄の娘で小野貞樹の妻となり、惟喬親王の母、紀静子に仕えた外命婦ではなかったか、といっています。

「日本文学の歴史・宮廷サロンと才女」では、小野小町の「町」は「三国の町」「三条の町」など、古今集の作者のように、後宮の女房の呼び名であろうとしています。小町の出身については不明で、推定するにも手掛かりがありません。

地方土着の豪族が国造といっていた頃、忠誠の証として自分の娘を差し出した、いわゆる采女説がありますが、これも根拠がありません。小野小町と称しているから、小野妹子や小野篁と関係があるのかも知れません。また歌人安部清行、小野貞樹、僧遍照、文屋康秀らと歌を交わしています。女房であったのなら、藤原良房の娘で文徳天皇の后になった明子、あるいは清和天皇の后高子に女房として仕えたのかも知れません。

「歴史を騒がせた女たち」の永井路子先生が、和泉式部、紫式部、清少納言、春日局、北政所など33人を上げていますが、小野小町は含まれていません。

小町研究者も史料がないので、正確には書けていませんが、4人の歌人と歌を交わしているところから大凡の年代が分かります。

僧遍照の生没年は（816年～890年）であり。小町と親密な付き合いがあったといわれています。文屋康秀が三河に赴任する時、ついて来ないかと、小町を誘ったといわれています。その時、小町が返した歌があります。

「わびぬれば　身を浮草の根を絶えて　誘う水あらば往なむとぞ思ふ」小町

落ちぶれた私だから、誘われたら何処にでも付いて行きますという意味ですが、本当について行ったのかは分かりません。また文屋康秀氏の生年は不明、没年は仁和元年（885年）頃と伝えられています。享年65歳とした場合、弘仁10年（820年）頃となります。もし、そうだとすると、小町は825年～830年頃の生まれではないかと思われます。

髄心院に小町の歌碑があります。安部清行に返歌した強気な一句とは違う歌です。

「花の色は　移りにけりないたづらに　我が身世にふるながめせし間に」

優しい歌です。

小野小町の系譜は不明であり、父や母などまったく分かりません。絶世の美女であったといわれていますが、その確証もありません。小町の顔を描いた絵や像などもありません。後世に描かれた絵は、後姿の絵で顔が描かれていません。

江戸時代「鵲橋」はなかった！

交野市　堀家啓男

江戸時代、東海道（京街道）枚方宿の東見附を出て禁野村に入る往還筋の天ノ川に「鵲橋」は架かっていたのか、それともなかったのか、あったとすればどのような橋だったのしょうか。

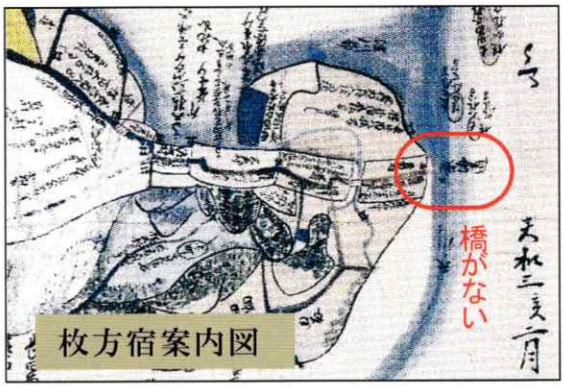
天野川の表記

大阪府の公式表記は「天野川」ですが、本文では「枚方宿役人日記」の「天ノ川」を使用しています。

1　絵図などを見てみる

（1）橋のない絵図が多い…

○天和3年（1683年）、「枚方宿絵図」（下図参照／鍵屋資料館展示）では、岡新町村境の中川橋、伊加賀村入口の伊加賀橋は描かれていますが、東見附の天ノ川に橋はありません。



枚方宿案内図

○元文2年（1737年）、「東海道枚方宿三ケ村絵図」（同）でも、中川橋、伊加賀橋は描かれていますが、東見附の天ノ川に橋はありません。

○享和3年（1803年）、「京街道図巻」（同）も、中川橋、伊加賀橋および禁野村の日野橋は描かれていますが、天ノ川に橋はありません。

（2）橋が描かれているものもある…

○享和元年（1801年）刊行、「河内名所図会」巻六の「天川（あまのかわ）」の項（同）では、天ノ川の往還筋に三本柱の橋桁のある、かなりの規模の橋が描かれています。

河内名所図会（天川）

観光ガイドブックに、実態と大きく異なる光景を載せる

とは思えませんので、図会取材のときには、天ノ川に橋があったようです。

○文化3年（1806年）完成、「東海道分間延絵図」をみると、小さな橋が往還筋の天ノ川下手に描かれています。岡新町村の中川橋と較べてもはるかに小さく、簡易です。この絵図は幕府道中奉行が測量し作成したものです。

○文政13年（天保元年／1830年）（「枚方宿役人日記」（中島三佳他訳）の記事

紀州侯の参勤交代は、中期以降、宿駅制度の充実に伴い、京街道を経由し、枚方宿に休宿泊することが通例となりました。

岡新町村の庄屋で、枚方宿問屋役人でもあった中島儀輔の日記は、文政13年閏3月5日、紀州侯が御帰国の途中、枚方宿に泊まる予定であったので、その前日の3月4日、岡村、岡新町村からそれぞれ人足10人を出し、磯嶋村の大工とともに天ノ川の往還筋に（「公儀の」＊筆者注）仮橋を架けたこと。そして5日の通行当日は晴天で仮橋を予定通り通行してもらったと記しています。

もし当日が雨の場合は、仮橋の上手に往還筋を避けて架けている（「村普請の常設の）板橋を併用することとし、念のため前日から〆にしてこの橋を通行禁止にしていたが、幸いにも当日は晴天であったため、予定通り往還筋の公儀の仮橋の通行で済んだというのです。

儀輔はすでにあった村の板橋を「上板橋」と呼び、通行直前に往還筋に設置した公儀の仮橋を「下仮橋」と呼んでいます。

「枚方宿役人日記―中島儀輔御用留」（中島三佳他訳）

『一　閏三月四日　…天ノ川仮橋ノ義相談居候処、角野氏御出、尚又浅井氏御出ニ而相談ノ上、仮橋往還へ為付、人足岡村拾人、当村拾人 並ニ大工磯嶋村与三兵衛した町より為掛、仮橋ノ中〆穴堀柱等為致候…略…仮橋ノ儀ハ天気成ハ右ニ而仕舞、雨天成ハ　上板橋入添、尤入添ハ早々出来候様、御申付承知仕候…』

『一　閏三月五日　晴天、紀州様御通行御泊り二付、町内ふとん清略、夫々へかし遣し取計候事、同断二付天ノ川橋ノ儀ハ、晴天ニ候へとも用意ニ、上橋へ〆入置候事二而、矢張下仮橋へ御遣し申し上げ候…』

すなわち、紀州侯通行当日の文政13年（1830年）閏3月5日には、天ノ川の往還筋の上手に常設の村普請の板橋（上板橋）が、さらに公道である往還筋には4日に臨時に架橋した公儀の下仮橋があり、ふたつの橋が並んでいました。

紀州侯の通行後、往還筋の公儀の下仮橋は直ちに片付けられ、天ノ川に元どおり村普請の上板橋ひとつのみになったのです。なお村普請の上板橋は、同日記によれば同じ年7月に大水で流されたとあり、東見附の天ノ川に橋はなくなります。

○『安政期頃の様子を示す「宿村大概帳」では、普段の干川の時は往還より六間川下に仮橋を常設するとしている』（枚方市史年報第10号「近世後期における淀川水系の環境変化と天の川橋」馬部隆弘著　以降「馬部論文」）幕末頃、常設の村普請の板橋は往還筋より

6間川下に設置されていたとし、往還筋を避けてその上流側や下流側に場所を変えて適宜架橋され、幾度か流失し、また再築されたようです。

○『慶応元年（1865年）第二次長州戦争のとき、軍事利用を契機として、之までになく立派な「仮土橋」が「掛増」され』『これ以降どの絵図をみても天の川橋は描かれるようになる。』（馬部論文）とされ、往還筋に公儀管理の常設橋が幕末の絵図に描かれるようになったとしています。

2　始めは歩行渉り、やがて村の橋と公儀の仮橋、明治以降は鵲橋

○歩行渉り　絵図などを時代順に追って見ると、18世紀末以前には天ノ川に橋は描かれず、享和元年（1801年）の「河内名所図会」で初めて往還筋に橋が現われます。それまでの約200年間、東見附の天ノ川に橋はなく、人々は歩行渡りしていました。

○村普請の橋　19世紀初頭（文化3年1806年）の道中奉行の「東海道分間延絵図」では、天の川の「付記」として「仮土橋」「平常干川　出水の節　歩行越」というふうに書かれています。

「天の川には仮設の土橋がある」とし、また、「通常は水が流れていない枯れ川である。出水のときは歩行で渉る」というのです。

このことについて馬部論文では、近世後期、淀川の川床上昇のため天ノ川へ逆流水があり、『干川の時は仮橋で渡り、出水の時に歩行で渡るという一見矛盾した表現は、干川の際には淀川の水が天の川下流域に滞留するため仮橋が必要となり、逆水の際には仮橋は流される危険があり、上流にまわるなどして歩行渡りとならざるをえないことを意味している』と記しています。

近世後期、逆流水滞留のため村人の日常生活の便宜上、公儀の往還筋を避け、その上手（儀輔のいう上板橋）または下手に村が管理する簡易な「仮土橋」を架け始め、「東海道分間延絵図」の「付記」の「仮土橋」がそれと思われます。

「枚方宿役人日記」には閏3月21日の条で、この仮土橋の管理費用として通行人から2～3文の橋銭を徴収していると記し、強制しないよう橋番を指導することが決められています。銭取橋ともよんだそうです。

○大名行列などのための仮橋

近世後期には大名行列などの大掛かりな通行がある場合、滞留水による通行支障をなくすため、その通行の直前に、宿で保管している橋材を用いて往還筋に臨時の「仮橋」を架橋しました。

「枚方宿役人日記」では紀州侯の行列のほか、文政13年（1830年）7月、大坂城「御番衆」の幕府役人の通行の場合も仮橋が架けられており、紀州侯に限られたことではありません。

毎年、紀州侯の通行があったため紀州侯専用のように見えたのでしょうが、『御三家のご威光で専用の橋が架けられたのだ』というようなようことはありません。まして仮橋は洪水で流されるまで使われ、流されたときは毎年の紀州侯

の通行のときに、七夕のように架橋されるといった説は、七夕伝説に悪乗りした妄説なのです。

「河内名所図会」の「天川」の橋はすっかり風景になじんでいますが、以上のことから、この橋は常設の村管理の「仮土橋」がなかった享和元年（1801年）の頃、大名行列通行の直前に架橋された臨時の仮橋と推測できます。

図会の大名行列は、参府途中の紀州藩主治宝（はるとみ）公か別の大名、または江戸へ帰る大坂城の幕府役人と思われます。図会刊行の翌年および翌々年に作成された上述1の（1）の絵図にも、やはり橋はなく一般は歩行渉りでした。

○天ノ川の「鵲（かささぎ）橋」　橋名「鵲橋」が架かるのは明治以降で、旧枚方市史は「府費をもって架橋後のことであり、それまでは仮に鵲橋と呼んでも正式に名づけられていたものではなかろうと、思われる」と記しています。

「枚方宿役人日記」でも「板橋」または「天ノ川の橋」と記しており、江戸時代、東見附の天ノ川に「鵲橋」はなかったのです。

現在の鵲橋（平成８年３月竣功）

天野川とかささぎ橋

（左の文章は鵲橋の横にある説明板から抜粋しました）

（略）川砂白くゆるやかな流れは古くから天上の銀河と見なされ、在原業平をはじめ平安貴族のあこがれる歌どころでもあった。

いつの頃かこの川に橋が架かった。古代中国の棚機（七夕）説話によると、天の川にかささぎが群れあつまって橋となり、牽牛と織女との橋渡しをすると言われている。この説話にちなんでかささぎ橋と呼ばれるようになった。鎌倉時代、淀川を下った中務内侍は「これやこの七夕つめの恋渡るあまの河原のかささぎのはし」と詠んだ（七夕つめ＝織女）。

江戸時代、かささぎ橋は京街道の橋で、「河内名所図会」には、たくさんの橋脚をもち欄干のない長い土橋が描かれている。

（略）

機関紙の文責について

宿場町枚方の原稿のうち、著者名のあるものは、投稿された原文をもとに編集しています。編集の都合上、若干原文と異なる部分もありますが、内容は原文に沿っていますので、文責は寄稿者にあります。ご了承ください。

新会員紹介

平成28年2月末日現在

上遠野浩一さん　香里ヶ丘

池田　達郎さん　大阪市

古後　靖弘さん　枚方上之町